

## | 記念シンポジウム |

# スポーツから変える世界と未来

■日時：11月14日(土) 14:15~15:55



<講演者・シンポジスト>

**宮嶋 泰子**

スポーツ文化ジャーナリスト  
(一社)カルティベータ代表理事

<コーディネーター>

**來田 享子**

中京大学スポーツ科学部教授  
同大学院体育学研究科研究科長

<シンポジスト>

**兼松 由香**

2016年リオデジャネイロ五輪  
ラグビー日本代表

**堀田 崇**

NPO法人LOVELEDGE理事長／弁護士

**村木 真紀**

認定NPO法人虹色ダイバーシティ代表

(來田) 皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、來田享子です。どうぞよろしくお願いたします。このシンポジウムのテーマは、「スポーツから変える世界と未来」ということで、本来は2020東京大会から2ヵ月というところで皆さんと一緒にすることになっていりましたが、残念ながらそうなりません。しかし、今日は「スポーツには社会を変える力がある」ということ、スポーツの力をどのように活かせるかということについて、大会が延期になり、コロナ禍にある社会の中で、皆さんとともに考えたいと思います。

このシンポジウムでは、最初に宮嶋泰子さんにご登壇をいただき、基調講演を行っていただきます。その後、合計4人の先生と一緒にパネルディスカッションを展開していくという形で進めていきます。参加者の皆さんはオンラインの画面で私たちを見ていただいておりますが、ご質問等あれば、チャットにどんどん送っていただき、後半では、いただいたご質問の中から、一部を取り上げて共有したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。それでは最初に宮嶋さんから基調講演をお願いします。宮嶋さん、どうぞよろしくお願いたします。

(宮嶋) よろしくお願いたします。宮嶋泰子と申します。私はテレビ朝日にずっと勤めていました。今年1月に、正式に退職をしたのですが、43年間、ほとんどスポーツフィールドでした。私は体育大学でスポーツの勉強をしたわけではありませんので、取材を通して毎回、スポーツの意義や力とは何なのだろうと考える日々でした。そうしたものから今日は皆さんに何かお話しができたと思います。

さて、全体的なテーマは「スポーツから変える世界と未来」ですが、私自身は本当に43年間を振り返って、スポーツの意義、スポーツが持つ力とは、を考え続けてきましたので、そのお話しをして、未来への一步を考えるという構成にしたいと思っています。

現在、私はスポーツ文化ジャーナリストとして活動しています。「カルティベータ」という一般社団法人を立ち上げ、その代表理事をしています。今日の柱は8本立てました。

1. 「仕事としてスポーツと出会う」
2. 「1980年モスクワオリンピック」
3. 「東京国際女子マラソン」
4. 「アナウンサー兼ディレクターとして」
5. 「障がい者のスポーツ・パラリンピック」
6. 「難民とスポーツ」
7. 「イスラム国家の女性たち」
8. 「日本のスポーツ界における問題点」としました。

まず1番目ですが、本当に私は仕事に恵まれ、様々な方と出会い、インタビューをし、世界中へ行くことができました。その中からいろいろ得た経験はあるのですが、もともとは1977年にアナウンサーとしてテレビ朝日に入社しました。希望は報道系で、外国と日本の違いを考える番組などをやりたいという思いはあったのですが、現実的にはスポーツ担

当を命じられ、本当にショックでした。

といいますのも、大学で学んだのはフランス文学で、人間の生き方や哲学でした。子どもの頃からお転婆で、運動部活動をしていたというだけで、スポーツについて何か深く勉強したという経験がほとんどありませんでした。テレビ界を見ても、スポーツを担当する女性はディレクターでもほとんどなく、唯一、庶務の女性がいたというぐらいで、他局を見てもどなたもいらっしゃいませんでした。そんなことから本当にショックでした。

実は、1980年に開催され、日本が出場できなかったモスクワオリンピックの独占中継権をテレビ朝日が獲得したため、そのための要員ということで、私が担当することになり、モスクワに向けて私は様々な取材をしました。海外から日本に来て、国際ジュニア体操に出場するハンガリーの選手にインタビューをした時、はたと気づいたのです。ハンガリーは当時、社会主義国家ですし、なかなか状況を知ることができない国です。それが選手と話している内に、細かいところからいろいろなものが見えてきました。そこで「スポーツという穴を通して、世界の在り様が見えるのかもしれない」と思い、俄然、このスポーツという穴から世界を見ることに興味を持ち始めました。



そして2番目にあります1980年のモスクワオリンピックです。ここで私は、“政治とスポーツ”というものすごい大波にあらわれるものに激突しました。これは、80か国が参加した少し寂しいオリンピックの開会式の様子です。当時、山下泰裕さんは、出場すれば絶対金メダルは間違いなしと言われ、瀬古利彦さんも同様でした。JOCの現会長の山下さん、それからマラソンリーダーの瀬古さん。この二人が今東京に向けて牽引してくれていますが、本当に彼らにとっては大変辛いオリンピックでした。

ちょうどこのモスクワオリンピックが行われる半年ほど前の1979年12月に、ソビエトがアフガニスタンに侵攻します。これをもってアメリカのカーター大統領が西側諸国にボイコットを呼びかけました。日本政府からはJOCに通達があり、日本はボイコットを決めるわけです。政治に利用され、政治の波にのまれていくスポーツというのを目の当たりにしました。

当時の日本のスポーツ界を牛耳っていたのは99%男性です。私がモスクワに行きますと、イギリスは、政府が駄目といったにもかかわらずイギリスオリンピック委員会が独自に選手を派遣し、更にフランス、イタリア、オランダ、ベルギー、ポルトガル、スペインもオリンピックに参加していました。またオーストラリア、ニュージーランドというオセアニアの2か国も参加しました。国旗の代わりにオリンピック旗、またはNOCの旗を使用しての入場行進でした。スポーツは、国の政府の判断を超えて、独自の判断を下せるものでもあることをここで知ったわけです。しかしながら、日本、西ドイツ、韓国、イスラム諸国、反共的立場の強い諸国50か国はボイコットしました。国旗を持って入場したのが65か国、オリンピック旗が14か国、そしてNOC旗が2か国でした。しかし、ここで私は、“国によってスポーツの持つ価値が異なるのだ”ということも同時に知るわけです。

続いて3番目の「東京国際女子マラソン」です。世界中から本当に素晴らしい女性たちが来ました。私は彼女たちから、多くを学びました。テレビ朝日の中継したこともあり、私はこの1979年開催の“世界初の女子マラソン”である東京国際女子マラソンで、リポーターやインタビュアー、実況ということもやらせていただきました。

第一回目のレースで、ジョイス・スミスさんがハンカチを持ってずっと走っていました。当時は“スミス婦人”と言われていたスミスさんに、「なぜハンカチを持って走っていたのか」とインタビューしたところ、「道路に唾を吐くのははしたないので、こうやってハンカチで唾や痰を取っていました」とおっしゃいました。翌日の新聞では、「実にレディらしい」というような表現がされていました。

実はスミスさんというのは、もともと3,000メートルの世界記録保持者でもあり、ミュンヘンオリンピックでは1,500メートルにも出場していました。世界にはこういったアスリートがもう既に存在していたわけです。しかしながら日本には、当時42.195キロを走る女性がいませんでした。日本陸上連盟は、急遽合宿を組み、大学で3,000メートルを走っている学生や趣味でジョギングをしている女性を集めました。この第一回の大会で、村本みのるさんという、新聞配達をして36歳でジョギングを開始した女性が7位に入りました。こんなスポーツの時代でした。

このマラソンがきっかけとなり、その5年後、1984年のロサンゼルスオリンピックに女子マラソンが入ることになりました。実は女性も42.195キロを走れるということがわかったことにより、むしろ長距離は男性よりも女性の方が向いているのではないかと、というような研究発表をされた方もいらっしゃいます。

女性は長い距離を走れないと言われた時代がありました。この写真は、人見絹枝さんです。1928年のアムステルダムオリンピック、女子800メートルで人見さんは銀メダルを獲得しました。しかしゴール後、全員倒れてしまったため、「女子には200メートルより長い距離は体力的に無理である」と国際陸連が判断しました。以後、800メートルが復活



したのは、その32年後、1960年のローマオリンピックの時でした。42.195キロを東京国際女子マラソンで走れることが実証され、オリンピックにマラソンが入ったという流れです。

時代的に見ますと、このアムステルダムオリンピック、女子の陸上競技が初めてオリンピックに入った大会です。歴史を見ますと、イギリスではその10年前に女性に投票権が認められ、かつ、アメリカの婦人参政権は1920年なのです。その8年後にアムステルダムで女子の陸上競技がオリンピックにりました。

これは女性の参政権がなかった時代のポスターですが、文句を見てみますと、女性が「そろそろここから出ていい時期なのに。鍵はどこにあるのでしょうか 犯罪者、狂人、そして女性たちは国会選挙に投票できない」と書いてあります。いずれにしても、スポーツと時代の出来事はリンクするというのを、ここで私は知りました。ちなみに日本の婦人参政権は1946年、第二次世界大戦が終了してからのこととなります。

さて、東京国際女子マラソンで驚いたことの一つをご紹介します。この左側の写真は当時ソビエトから来たツフロさんで、途中で足が痙攣しました。そうしたら、なんと、胸のゼッケンを留めていた安全ピンを外して、自分の太ももに刺して痙攣を止めようとしてました。これを見て男性は、「女は何をやるかわからない、たくましい」と言いました。

私をもっと驚いたのは、ツフロさんと一緒に来たイワノワさんです。イワノワさんはこの大会で優勝しますが、実はイワノワさん、あとでわかったことですが、この時、妊娠していました。その翌々年来日した時、イワノワさんが「今、子どもがいて」と言うので、「いつ生まれたのですか」とこうやって計算していたら、「これは、前回お走りになった時、妊娠していらしたということですか」「そうなのよ」と顔を真っ赤にしました。

当時、共産圏では、妊娠すると、女性がホルモンの関係ですごく強くなるという研究をしていた方がいるということを知っていました。その研究では、妊娠して、その後墮胎してしまうというようなケースが報告されていたので、彼女にそれを聞こうかと思ったのですが、顔を真っ赤にして「本当に知らなかった。あとでびっくりした」ということでしたので、彼女はそのケースではなかったのかもしれないと思いました。いずれにしても、女性の体というのは、本当にまだまだ未知数という時代でした。


次にこの写真をご覧ください、女性マラソンランナーで、ご主人とお子さんがいます。1980年代にマラソンブームがやってきますが、ノルウェーのイングリッド・クリスチャンセンという選手です。元クロスカントリーのヨーロッパジュニアチャンピオンでしたが、マラソンに転向し、何と世界最高記録を出しました。そして出産して尚、記録を更新するという素晴らしい選手が誕生しました。海外の選手は、試合で知り合ったり、お互いに電話したりして、「あなた、妊娠した時はどんなトレーニングをしたの」「出産した後はどうやってリカバリーしていったの」など、情報交換をしていました。ところが、そういう意味で言うと、日本は遠く、言葉の問題もあったため、著しくそういった情報から閉ざされてしまっていました。

実は私は、2012年にスピードスケートの岡崎朋美さんが妊娠した時、いろいろと婦人科の先生に聞いてみましたが、「日本にはまだ何のデータもない、トレーニングに関する事も何もわかっていない」と言われました。これが当時、産婦人科医のナンバーワンの先生からの答えでした。

さて次に、私はアナウンサー兼ディレクターとして仕事を始めるわけですが、ここでは社会とスポーツのつながりを意識するようになりました。ちょうど1984年のロサンゼルスオリンピックで、女性だけの二つの種目が採用されました。シンクロナイズドスイミングと新体操です。こうした種目に関して、アナウンサーとして実況を担当するようになりました。この時、男性アナウンサーが「僕は女性が足を上げたり広げたりしているのを、どう喋っていいかわからないから、やって」と頼まれ、私が引き受けてやることになりました。

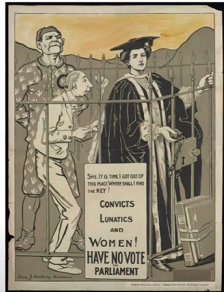
それから、同時に夜のスポーツ番組でスポーツニュースキャスターを担当するようになりましたが、これは当時、私が初めてでした。今は、ほとんどどこを見ても、スポーツニュースは女性が伝えています。当時女性がスポーツやニュースを伝えるというのはまずありませんでした。「この日、江川がナイスピッチング」と言えば、「選手の名前を呼び捨て

**1928年**  
アムステルダム五輪  
女子の陸上競技が初めて五輪に入る





**\*イギリスは1918年、女性に投票権を初めて認める**  
**\*米国婦人参政権は1920年**

女性の参政権がなかった時代のポスター  
「女性『そろそろここから出ていい時期なのに。鍵はどこでしょう』」  
「犯罪者、狂人、そして女性たちは国会選挙に投票できない!」



**4:アナウンサー兼ディレクターとして**  
**社会とスポーツのつながりを意識する**

女性だけの競技が生まれ  
アナウンサーとして実況を担当する

にするんじゃない」というような苦情や抗議電話がきました。そんな時代でしたので、江川さんがとか、江川ピッチャーが、などという言い方をしていました。

たまたまこの時、報道局仕切りのニュース番組でしたので、プロデューサーからは、「スポーツも一つの社会現象として扱うように。単なる結果だけでなく、それが社会的にどのような意味を持つのか考えるようにしなさい」と言われ、そのお陰でいろいろなことがわかり始めました。

1983年、「テレビスタジオ」という番組で野村克也さんとご一緒し、私がこの番組のキャスターになりました。私は当時、バレーボールの日本リーグに全部ついて中継のリポーターをしていましたので、プロデューサーから「バレーボールに詳しいのだから、自分でこの企画を作ったらどう？」と聞かれました。「では、やってみます」と担当し、いきなり20分の企画を制作しました。ここでは自分で番組を作る面白さに目覚めました。

その後は、土日の夕方の「スポーツリーダー」のキャスターをし、その中の3分コーナー企画を2年間にわたって、自分一人で企画、取材ロケ、編集、原稿書き、ナレーションを担当し、本番の放送をしました。これはとても大変です。当時、他のニュースもいろいろ入ってくる中で、自分の企画を編集するため編集室に入り、「そこ、はい、カット。」などと言いながら、そこで本番用のメイクをし、その他のニュース原稿のチェック、リハーサルもしてというような、地獄のような時間でしたけど、楽しかったです。それで地力はついたかなと思います。

「ニュースステーション」という番組が始まって、ディレクター兼リポーターとなり、年間15本の特集を作り始めました。これは33年間続く仕事となります。ここに橋本聖子さんの写真を入れてありますが、橋本聖子シリーズは15本作りしました。当時は女子アスリートを多角的に長期間捉えたものは少なかったということもあり、ニュースステーションそのものが大体20%の視聴率を誇るものでしたので、そこでもう22~23%は当たり前、30%に近い視聴率を取るという形で、「女性のスポーツ」というものに初めてスポットが当たり始めたと思います。

最初は、なぜこんなことをするのか、一体何があったのかというような、選手の心の中を覗いてみようと思いました。私はフランス文学を学びましたので、こういうことに対しては非常に興味があったのです。

ところが、これが何作か続けていくうちに、橋本聖子さんが25歳の時、周囲から、「そろそろやめたら」と肩を叩かれるようになってきました。これは、彼女が富士急行に入社して7年目のことです。当時、実はOLも25歳ぐらいで肩を叩かれる現象があった、ということです。要するに社会一般で女性が直面している問題とスポーツ選手が抱えている問題というのは非常に似ている、同じだということに気づきはじめました。私はそれ以降、女性アスリートを意識的に取り上げるようになり、更に社会問題とリンクさせるようになりました。

続いては、「障がい者のスポーツ、パラリンピック」についてです。“今あるものを数える。”「ニュースステーション」というのは、私の場合、最終的にプロデューサーの許可があれば、自分で企画を立てることができたので、他の人がやらないことをやろうと思っていました。アナウンサーの新人時代から日本点字図書館で朗読ボランティアをしていましたので、障がいを持った人のスポーツは一体どうなっているのかということに非常に興味を持ったわけです。

1992年バルセロナパラリンピックを目指す車いすレースの選手たちを取材し、初めて見ましたら、これが大変で、これは取材をして皆に知ってもらって価値が十分にあると思った次第です。

例えば車いすと言いますが、脊髄損傷と頸椎損傷の二つがあります。頸椎損傷というのは首、ここを損傷してしまった場合、まず体温調節ができず、汗をかくことができません。手首の力もないというような形で、一般に言う脊髄損傷よりもいろいろな症状が重くなります。彼らが陸上競技のトラックで走った時、本来であればこれだけ運動すれば汗が出るはずですが、ところが体温が上がっていても、彼らの機能として汗が出ないわけです。そこへマネージャーやコーチが走っていき、ジョウロから水をザーとかけたり、霧吹きで汗の代わりに彼らの身体に撒いて彼らの体温を下げるというようなことをしていました。なぜそこまでしてスポーツをするのか。そこにも実に興味を持ちました。

「ニュースステーション」ではアトランタのパラリンピック、更には長野のパラリンピックで連日速報、更にシドニーのパラリンピックも連日速報を入れました。これらにより、かなり当時としては、障がい者もスポーツを楽しむ時代になったと、皆さんは感じられたのではないかと思います。

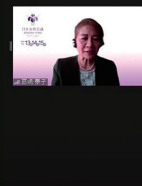
この障がい者のスポーツの生みの親と言われるのがグッドマン博士という方ですが、「失ったものを数えるより、今あるものを数えよ」という言葉を皆さんに贈っていました。これも私は今とても大切にしていることの一つです。

アメリカの障がい者のアスリートを通して、環境の違いを知る番組も作りしました。アメリカの車いすバスケットボールの第一人者、ランディ・スノーという選手は一人で生活をしていました。彼は自宅から車を運転して、空港に行きます。次の空港に着いた時にレンタカーを借りて試合

ニュースステーション

- ・アトランタパラリンピック特集 18分 視聴率21%
- ・長野パラリンピック連日速報 + 年末特集 +1時間特番
- ・シドニーパラリンピック連日速報 + 1時間特番

<失ったものを数えるより、今あるものを数えよ>  
グッドマン博士の言葉





会場に行きますが、車いすなのですね。車いすの人は今ここに写真があるような、こういったものを持っています。これをアクセルとブレーキに付けることにより、手でコントロールすることができるわけです。これさえあれば、レンタカーを借りられる。しかし日本には、これは許可されていませんので、日本の人たちはこういうことができないのだということを知りました。

さて、長野パラリンピックは日本で行われたということで、ロールモデルが現れました。アイススレッジレースの二人の選手、一人は金メダル2つ銀メダル2つを取った土田和歌子さんです。もう一人が松江美季さん、金メダル3つ銀メダル1つでした。この二人はその後、全く違う形でパラリンピックに貢献していきます。

土田和歌子さんをご存知のとおり、その後、4年ごとのパラリンピックに全て出場しています。そして、2020年東京大会では、パラのトライアスロンに挑戦することにしています。ここに写真を載せていますが、出産もされました。帝王切開をしたらと勧めのお医者さんに、「自然分娩で産みます」と、見事に男の子を産みました。右の写真は旦那さんです。旦那さんが赤ちゃんを抱えています。当時としては本当に珍しかったのです。彼がコーチ、マネジメント、全てのアシスタントをして、ここまで土田和歌子さんは成長してきたわけです。

それからもう一人のマセソン（松江）美季さんは、東京学芸大学を卒業した後、イリノイ大学に入学しました。そして、カナダのアイススレッジホッケー選手で、長野大会にも参加したパラリンピアンと結婚しました。今は二人の男の子のお母さんです。実は松江さんは学芸大学に入った時から、学校の先生になりたかったのですが、事故に遭い、車いすの生活になりました。日本では、車いすでは学校の先生は無理だと諦めていたわけです。カナダに行った時、「本当は先生になりたいけど無理よね」と言ったら、「なぜ無理なの？」と周りの人に聞かれたそうです。「だって車いすだもの」「なぜ車いすだったら先生になれないの？やればいい」と後押しをされ、彼女は小学校の教員として7年間勤めました。

日本の現状もカナダの現状も知るマセソン美季さんは、今IOC国際オリンピック委員会、及びIPC国際パラリンピック委員会の教育委員を務めています。何をしているかといいますと、教材を作りました。両国の違いを知ることがありますから、こういう風にすれば障がいを持った人でも、きちんと生活をし、楽しくスポーツができるのだ、というような教材です。IMPOSSIBLEという言葉にアポストロフィーを付ければ“I'M POSSIBLE”となります。“I'M POSSIBLE”という言葉は造語ですが、「私はできる」という意味にもなります。世界中を回り、世界中の学校の先生にこの教材を説明し、どういう授業をすればいいかということも教えています。勿論、日本でもこれをやっています。

しかし当時、私がこうやっていち早く障がい者のスポーツ取材している中で、こういったことを全く理解しない人もいました。特にショックだったのは、91年に障がい者のスポーツ取材し始めた頃、アナウンス部の男性に「障がい者を見世物にして、どういふつもりなんですか。あなたもその内に因果応報で障がいを持つようになります」と言われ、がっかりしました。ある意味まだまだ日本の中には古い因習が存在することを認識し、これを変えていくことが私のミッションだと思いました。

この辺りから、私は女性選手のロールモデルを番組で提示していくことを始めます。平昌オリンピック、スケート金メダリストの小平奈緒さんも、中学生の時に「宮嶋さん、将来宮嶋さんに番組を作ってもらえるようになります」と言っていたのですが、実にまさにそんな選手になりました。

大学時代も自分でバイオメカニクスの動作解析をして卒論を書きました。そのようにやはり自分で研究しながら、スポーツとして活かしていく。そういう選手が私は理想だと思いますので、そういう例を番組で紹介したりもしました。

何が選手やコーチの理想形かということに関しては、私は本当にいろいろな大学の先生方に感謝しなければいけません。といいますのは、いろいろな審議会やいろいろな勉強会にたくさん入れていただき、皆さんがどういう方向性に向かって研究されているかということ共有できたお陰だと思っています。ですから、会社で番組だけを作っていたのではわからないことを様々することができ、これがとても大きかったと思います。

そして「難民とスポーツ」です。“人はパンのみにて生きるにあらず。”私はアフリカとネパール、3回の難民キャンプ取材をしています。一回目は2007年にネパールにあるダマク難民キャンプに、1976年のモントリオールのバレーボールで金メダルを取った人たちと一緒に、早稲田大学の学生を連れて行きました。白井貴子さん、矢野広美さん、金坂克子さんの3人ですが、驚いたことに、「金メダルが役に立ったと思ったことは、これまで一度もない」とネパールのUNHCR国連難民高等弁務官事務所の責任者の方に話していました。地方で生活していると、「金メダリストのくせに…」と指をさされることの方が多いということでした。

ここで難民キャンプの生活をご紹介します。国連難民高等弁務官事務所の下、守られ、食事や生活の家はあるものの、籠の中の鳥のようだというのでストレスがたまり、密造アルコールを作って中毒になったり、DV（ドメスティックバイオレンス）、婦女暴行などが増加するというのが一般的な難民キャンプでの生活でした。

女性は子どもの頃から宗教的な理由もあり、仕事を手伝われ、遊びやスポーツをしたことがありません。私たちが行った3日間は、練習したり試合をしたりしたのですが、「こんなに自由に遊んだのは初めて。全くこんなに開放され



ることはなかった」というような話をしてくれました。

私はその後、番組を作るために3か月後、再び取材で同じ難民キャンプを訪れました。そうしましたら、若者の組織で自主的に定期的にバレーボール大会が開かれていました。それも、円でパスの練習をしている子どもたちは、男女が一緒になってやっているという、これまでキャンプの中では全く考えられないようなことが起こっていました。一緒に行った3人のメダリストにとっても、「初めて人の役に立った、金メダルを取って良かった」と初めて思ったということでした。難民の女性たちは自らの身体で自由に遊ぶ経験を積み、メダリストたちは自分たちが弱者の役に立つ存在だと認識した瞬間でした。

実はいろいろな写真がありますが、この右の一番下の写真は人ばかりです。スポーツが既存の障壁を崩すという、歴史的な出来事が起きました。難民キャンプというのは、周りの村と、とかく対立していることが多く仲が悪いのです。といいますのは、難民キャンプにはいろいろな物資が運ばれてきますが、周りの村は貧しい人たちが構成されています。時には燃やす薪をめぐる殺人事件も起きるぐらいです。それが、オリンピックのバレーボール選手たちがやって来たということを知り、30年以上のこの難民キャンプの歴史の中で、初めて、「試合に僕たちも出させてほしい」と村人がやって来たのです。ここで初めて交流が行われ、本当に感動的でした。最初、握手から始まり、村人も難民も合わせてのバレーボール大会になりました。スポーツが本当に壁を壊した瞬間でした。

さて、毎回私たちがネパールに行くわけにもいかないのです、これをきっかけに、日本に45年程前にやってきたインドシナ難民を中心とした、アジアスポーツフェスタを行いました。場所は、私が卒業した神奈川県立外国語短大付属高校が合併してできた、横浜国際高校です。多くの方にお手伝いいただいて実施しました。多くの方、特に女性にご参加いただくように促しました。女性が存分にプレーを楽しんでもらうため、子どもたちはこうやって別の部屋で、東海大学の女子の体操部の人たちに面倒を見てもらって下で遊び、女性は上で思い切りバレーボールをするというような形にして、最後には、皆で障害物たすきリレーをするというような構成にしました。

難民として来た女性たちは勿論、故国ではスポーツをするという機会はありませんでしたし、日本に来てからは生きるのに必死で、こんなスポーツをするなんていう経験もほとんどない方ばかりでしたので、これは年に一度でしたが、彼女たちにとっても大変いい経験になっています。

文化理解をするため、左はカンボジアの踊りの方ですが、これは見世物の踊りではないのです。王室古典舞踊学院で子どもの頃から教え込まれた方で、こうした踊り子たちの90%がポルポト政権によって狙われ殺されてしまいました。ですから、いの一番に逃げてきたということで、彼女が皆さんのために、「おばちゃんになってしまったけど、これは若い女の子のものなのよ」と言いながら伝統舞踊をしてくださいました。

そして右の写真の真ん中にいらっしゃるのはラオスからの難民です。プンサワットさん、お料理が大好きで上手です。周りにいらっしゃるのPTAのお母さん方です。学校のPTAのお母さん方にお料理を教え、それを皆でお昼にいただきます。こういうことから文化の理解も進みました。

アジアスポーツフェスタを10年間続けて何がわかったかということ、最初はベトナム、カンボジア、これはもう敵同士で銃口を向け合った相手ですから、敵対心剥き出しだったのです。それが7年目でビックリしました。人数が足りないということでベトナムとカンボジアの合同チームを作っていました。これには私は本当に驚きました。また、食を通してインドシナの民族文化に高校生が理解を示しました。本当にスポーツを通してのダイバーシティ&インクルージョンが進んだと思わずにはいられません。

それから私は、瀬古さんとイカンガーと一緒にアフリカのタンザニアのキャンプにも行きましたが、ここはRIGHT TO PLAYというカナダの組織がいろいろとお手伝いしてくれました。難民の子どもたちに重要で必要なことは、「あなたはコミュニティの中の大切な一人なんだよ」ということを、スポーツを通じて教えるということだったそうです。これも勉強になりました。

リオオリンピックの際に難民選手団が初めて参加し、東京にも選手団がきます。この難民選手団を率いるのは、テグラ・ローペです。ローペさんはご存知のとおり、マラソンの女王で、素晴らしい優勝経験を持っています。そして彼女に取材を行ったことがあります。たくさんいる兄弟のお世話をし、大学に出したり、病気になった時には手術費用なども全部みたりとか、そういうことも全部する彼女の優しさが、今難民の選手に走り方を教え、選手団となっています。「真に強き者は弱き者を助け、生きる希望を与える」。これは昨日の基調講演で上野千鶴子さんがお話しをしてくださったことですが、やはりこういう精神がアスリートにもあるということです。





ここからは「イスラム国家の女性たち」です。2012年ロンドンオリンピックから、すべての国が女子選手を派遣するようになりました。ヒジャブを被ったりして参加していますが、その中で私が取材をしたのは、2004年アテネオリンピックの時に柔道の代表として出たフリバ・ラザイーです。彼女は柔道をしたのですが、お母さんは大反対で、唯一、お父さんとお兄さんは理解を示してくれました。しかし、アフガニスタンの女性に求められているのは、10代で結婚し主婦となり子どもを産むことです。彼女は初めてインドに大会に出かける時、兄弟の一人から、「飛行機が墜落しますように。お前のような伝統的でないアフガニスタンの少女は、家族にとっても隣人にとってもコミュニティにとっても邪魔で恥だ」と言われたそうです。本来、守ってくれるはずの家族からも、このように言われるのです。彼女はオリンピックでは残念ながら1回戦で敗れました。世界チャンピオンに4回なったスペインの選手に敗れましたが、家に電話をすると、お父さんは「大丈夫だ。月への一歩のようなもの。歴史を作ったじゃないか。アフガニスタンにいる他の女性たちのために道を切り開いた」と言ってくれたそうです。

これでホッとしたのも束の間、実はオリンピックの出場はメディアにも取り上げられました。オリンピックの試合で頭にヒジャブを被っていなかったということで、隣人やコミュニティから脅迫を受け、その後10年間、身を隠さざるを得ませんでした。難民申請を出して、現在はカナダに住んでいます。第三国定住をして、ブリティッシュコロンビア大学で学位を取得し、現在Girls of Afghan Leadを設立し、アフガニスタンのスポーツをする少女たちを支援しているということです。今年の1月に東海大学に来たのですが、その時に驚いたのは、アフガニスタンから来た選手の一人が、「4日間連続で殴られずに朝起きたのは初めて」と言うのです。アフガニスタンで柔道をしていると、毎朝兄弟から殴られていたそうです。しかし、日本から帰った後は堂々としていたということもあり、兄弟たちは殴らなくなったそうです。そして今、アフガニスタンの女子たちの間で、非常に武術、柔道が盛んになっています。暴行が行われる日常で自己防衛に役立つということ、そして、自分の人生と身体をコントロールするのに柔道はとても役立つということです。スポーツは人生を切り開く武器となるということです。

最後に「日本のスポーツ界における問題点」をお話しします。私は体育会系と呼ばれるシステムからの脱却を、是非してほしいと思っています。実は今から7年前、「暴力根絶宣言」というのが行われました。「殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体制裁、言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ、更にセクシャルハラスメントなど、これらの暴力行為は、スポーツの価値を否定し、私たちのスポーツそのものを危機にさらす」とあったのですが、実はこの“セクシャルハラスメント”は最初入っていませんでした。これは850人ほどが集まったの会議でしたが、この宣言にどうしても入れてほしいと拳手し、「多くの選手たちを見てきたけれども、セクシャルハラスメントを是非入れてほしい」と提案し、入れていただきました。

この体育会系というのは軍隊的なヒエラルキー、理不尽な忍耐、年功序列、上意下達、無意識の男尊女卑、自己犠牲の強要、同調圧力などがあります。勿論、体育会系でいい関係を築いている方もいないわけではありません。いいところがあるのも確かにわかりますが、こういう悪いところの方が多いと思います。こうしたものはハラスメントの温床になります。実際にハラスメントを訴えても、組織の体面が第一で、上層部がもみ消してしまうという競技団体も存在するほどです。そういうことではなく、一人ひとりが尊重されるスポーツの環境、これが整った時に初めて、私はスポーツで変える世界と未来が生まれるのではないかと強く思います。

今は13人に一人がLGBTQと言われる現代社会です。そして年齢や性別にとらわれず、好きなスポーツをする権利が、誰にでもあります。シンクロも男女のミックスができるようになりました。よりすべての人の参加により、新しいスポーツの価値が創造されること。「より速く、高く、強く」という、こうした成長神話だけでなく、「より美しく、しなやかに、よりリズムカルに」更には、“より人間らしく”という価値も加えて、私はスポーツが変わってほしい、そして人間社会も変わってほしいと強く願っております。以上、ご清聴ありがとうございました。1分41秒、オーバーでした。

(来田) ありがとうございます。さすがアナウンサーとして鍛えたトークで、時間を最小限に上手く調整していただきました。本当にありがとうございます。

宮嶋さんからは、スポーツという穴から宮嶋さんがご覧になった世界、女性たちが乗り越えてきた壁を、歴史的なものも含めて紹介していただくとともに、それを多くの人に伝えるために、宮嶋さんご自身が乗り越えてきた壁ですね。そしてどんな変化が起きたのか。スポーツで世界を変え、より良い未来を作っていくため、これからどんなことを解決していかなければならないのか、ということまでを課題を含めてお話しをいただきました。本当にどうもありがとうございました。

それではこの宮嶋さんの基調講演を受けまして、今度は3名のパネラーの方を加えて、パネルディスカッションに入ります。最初にパネルディスカッションにご参加いただく方をご紹介します。宮嶋さんにつきましては、このままパネルにお入りいただきます。よろしくお願ひします。そして兼松さん、堀田さん、村木さん、3人の方それぞれに、私がご紹介するよりもご自身で自己紹介をしていただいた方がわかりやすいと思いますので、それぞれにご紹介をいただき

ます。それでは最初に兼松さん、お願いできますか。

(兼松) 兼松由香です。自己紹介をさせていただきます。私は2016年リオデジャネイロオリンピックに、7人制ラグビー女子日本代表選手として出場しました。現在は日本ラグビー協会女子7人制ラグビーのコーチを務めています。また中京大学大学院に在学中です。

私は、5歳の時に一宮ラグビースクールでラグビーに出会い、小学校6年生まで続けました。小学校ではサッカー、ミニバスケットボール、陸上部に所属し、中学、高校ではソフトボール部に所属していました。とにかく身体を動かすことが好きな子どもで、市内のちびっ子相撲大会にも参加していました。19歳の時に15人制ラグビーワールドカップに出場し、結婚、出産を経て、34歳の時にリオオリンピックに出場しました。詳しくは後ほどのディスカッションで改めてお話しさせていただきます。

リオ五輪後に大学院に進学し、現在はコーディネーターの來田享子教授の下で、女子ラグビーの歴史研究を行っています。また、将来オリンピックを目指す選手たちの育成や、ラグビーを通して、様々な活動にも取り組んでいます。本日はどうぞよろしくお願い致します。

(來田) ありがとうございます。2016年リオ五輪ラグビー代表の兼松さんにご紹介いただきました。それでは次に堀田さん、お願いできますか。

(堀田) よろしく申し上げます。堀田崇と言います。私は愛知県弁護士会に所属する弁護士です。平成12年の4月に名古屋弁護士会、現在の愛知県弁護士会に弁護士登録をし、今年で弁護士生活21年目になります。普段は名古屋市中区の事務所で、企業の顧問として、様々なご相談を受けたり、例えば一般の民事事件、債権の回収や、労働問題、交通事故、相続などの問題、こうした多種多様な問題を取り扱っています。

私自身も、兼松さんのように子どもの頃から身体を動かすのが本当に好きで、中でも特にサッカーが好きでのめり込み、現在、この年でも、いまだに社会人リーグ、シニアリーグと、年代に合わせた自分のフィールドを見つけてプレーをしています。

サッカーを通じたご縁で、女子サッカークラブであるNGUラブブリッジ名古屋というクラブに関わり始めました。以前は名古屋FCレディースという名称でしたが、現在はNGUラブブリッジ名古屋というクラブになっています。

最初、関わり始めたきっかけと言いますのは、私が“サッカー好き弁護士”であるということで、クラブ内で生じる様々な問題、後々触れますが、先ほど宮嶋先生のお話にあった様々なハラスメントの問題や、いろいろなものをこの世界からなくしていきたいということに関わり始めることになりました。

当時は東海リーグという地域リーグでプレーをしているクラブでしたが、それを日本女子サッカーリーグに昇格させるということも、一つの目標として掲げていましたので、そのお手伝いもしていました。現在は日本女子サッカーリーグに昇格し、日本女子サッカーリーグ、通称「なでしこリーグ」の3部に所属しております。

私自身は平成28年6月から、運営法人である「特定非営利活動法人LOVELEDGE」で理事長を務め、現在に至っています。ちなみにこのLOVELEDGEという名称は、愛知の愛と知、LOVEとKNOWLEDGEを掛け合わせた造語です。本日はどうぞよろしくお願い致します。

(來田) ありがとうございます。堀田さんに自己紹介していただきました。それでは最後に村木さん、お願いします。

(村木) 皆さん、こんにちは。虹色ダイバーシティ代表の村木です。私たちは、大阪にあるスタッフが4人の小さなNPO法人です。LGBTなどの性的マイノリティ、また「SOGI」という好きになる相手の性別や自認している性別によって格差が生じているのですが、その格差がない社会作りのための活動をしています。詳しくは『虹色チェンジメーカー』



特定非営利活動法人LOVELEDGE 理事長 弁護士 堀田 崇

平成12年4月 名古屋弁護士会(現愛知県弁護士会)に弁護士登録  
平成28年6月 特定非営利活動法人LOVELEDGE 理事長就任

 NGUラブブリッジ名古屋  
(愛LOVE 知KNOWLEDGE)

日本女子サッカーリーグ(なでしこリーグ)3部所属







という本を出していますので、是非、ご覧ください。

どういう格差かといいますと、学校や職場で、LGBTの子どもたちはマイノリティですから、どうしても疎外感を抱きがちです。学校の制服、スポーツのユニフォームもそうです。男女で分かれているということで、特にトランスジェンダーの子たちは学校にいづらくなってしまう。「男らしくない男の子」というのは、よくいじめの対象になります。こうしたことが原因で、学歴が低くなってしまい、それが原因でまた非正規雇用が多くなったり、貧困の問題が生じたりしています。メンタルヘルスも悪く、自死をされる方も多いという状態です。

先ほど、宮嶋さんからスポーツが社会を変えるというお話がありました。実は東京オリンピックで大きく変わるはずだったのです。オリンピック憲章の差別禁止規定の中で、“性的指向”という一文が入りました。これにより東京都は、オリンピック開催都市として新しく条例を制定しています。「オリンピック憲章に謳われる人権尊重の理念の実現を目指す条例」です。ここで、「都、都民及び事業者は、性的指向、性自認を理由として不当な差別をしてはならない」と明記されました。これは私たちにとって非常に大きなことでした。

今年の10月11日、東京の新宿に「プライドハウス東京」という場所ができています。これはLGBTに関する情報発信ステーションです。今ホームページもありますので、是非ご覧ください。

來田先生と一緒に、スポーツとLGBTに関する冊子も出しています。スポーツの現場でも、誰が好きとか、自分がどんな性別かによって、疎外される子どもたちがたくさんいます。是非その子どもたちがスポーツを諦めなくて済むようにサポートしてくださいということを書いています。

昨年、虹色ダイバーシティは、大阪マラソンに団体として20人のランナーを出しました。とても面白かったのですが、マラソン大会に登録して気づいたことがあります。登録したら、性別の情報が必須だということです。ランナーの位置情報がわかるアプリがありますが、あれも男女別になっているのです。これは特にトランスジェンダーにとっては大きなリスクですので、改善するよう要望書を出しています。

宮嶋さんの話でも世界での話がたくさん出てきました。LGBTであることで、実は死刑になる国もあります。オリンピックの期間に、もしかしたら“難民”として見える化するかもしれないと、個人的には思っています。私はこうした問題を解決していきたいと思います。今日はよろしくお祈りします。

(來田) ありがとうございます。今、自己紹介をしていただきました3人の方、そして基調講演をご担当いただいた宮嶋さんと私とで、このパネルディスカッションを進めていきます。

全員が全然違う世界を生きてきています。ジャーナリズムの世界、それからオリンピックアンとして、あるいは生涯スポーツ場面での支援者として、そしてスポーツを通してLGBTの人々の権利を考える活動をしている方、という、こういうメンバーです。全員に共通するのは、何らかの形でスポーツに関わっている、ということですね。

先ほどの宮嶋さんの講演では、政治、人種、宗教、言語、文化、その他の様々な差別や排除につながるというお話がありました。もちろん、この会議がテーマとしている性、性別や性的指向に関わる壁もあります。この壁をスポーツから越えられる場合がある、という、そういう事例を宮嶋さんのお話では示していただきました。その先には、多様な人々がお互いを尊重し、ともに生きる社会がきっと訪れるんだらうと思いますが、それは一体、どんな社会なのだろう、そのビジョンはどういう風にして自分たちは掴んでいるんだらう、ということテーマに、それぞれの立場から提示していただいて、共有できたらと思います。このテーマについて、堀田さんからお願いしてもよろしいでしょうか。

(堀田) 先ほど申し上げた通り、普段は弁護士として活動しています。弁護士の傍ら、このNGUラブリッジ名古屋という女子サッカークラブの経営、運営に携わっています。

このクラブは、ここにありますが、大きく分けて4つの年代に分かれています。主に社会人選手で構成するトップチーム、その下にアカデミーとしましてユースチーム（高校生年代）、ジュニアユースチーム（中学生年代）、ジュニアチーム（小学生年代）、この各カテゴリーで普段は活動しています。





このNGUラブブリッジ名古屋というクラブは、愛知県内で唯一、日本女子サッカーリーグ、通称なでしこリーグに所属しているクラブです。私たちはこのあらゆる年代で選手を育成し、ゆくゆくはトップチームで活躍するということを期待して、昔から、選手の育成には非常に力を入れて活動しています。では、なぜこのクラブが存在をするのか。そしてなぜ私がこのクラブに関わるようになったのかという点について、少しお話をします。

このラブブリッジの理念というものがあります。まずは①愛知県的女子サッカー界の発展、②女子サッカーを通じて、女性アスリートの地位を向上させ、女性アスリートが活躍できる環境を創出する、③女子サッカーを通じて、男女共同参画社会の実現に寄与するという、この3つになります。

私がこのクラブに関わるようになったのは、この理念に共感したということがスタートです。私がクラブに関わり始めた7年ほど前には、女子サッカー界には様々な問題がありました。先ほど、宮嶋先生からもあったような、本当に大きな問題があると実感しています。例えば、指導者による選手に対しての暴言、特に男性の指導者から女子選手への暴言が、非常に多く目につきました。それが正直、当たり前のようにある世界を変えていかないといけないのではないかとということも、一つの大きな動機としてありました。

私たちがこういった理念を掲げて活動していく中で、少しずつではありますが、関わっていただいた皆さんの努力もあり、少しずついい方向に向いてきたのではないかと実感しています。サッカーを含めたスポーツには、まだまだいろいろな可能性があるのではないかと、このクラブに関わりながら思っています。

後ほど、兼松さんのお話にも出てくるのかもしれませんが、本日見ていただいている方の中にも、「女性がサッカーをするのか」と思われる方がいらっしゃると思います。しかし、サッカーもラグビーも、男性だけのスポーツではないはずだと思います。もっと言えば、健常者だけのスポーツでもないと思います。あらゆる多様な人々が、それぞれの形、レベルでスポーツを楽しむことは必ずできるはずだと思います。

女子サッカーの世界では、来年から大きく変わります。女子プロサッカーリーグ、WEリーグというものができます。WEリーグは11クラブでスタートすることが、先日発表されました。私たちラブブリッジ名古屋は、加盟の申請をしませんでした。ただ将来的には、このWEリーグ、女子プロサッカーリーグへの加盟を目指し、いろいろな環境整備をしようと考えています。

少し偉そうな言い方になりますが、WEリーグへの加盟は、それ自体が目的ではなく、私たちの理念を実現するための一つの手段であり、この理念を実現していくために、WEリーグに加盟するということが重要な手段になるという考え方をしています。

WEリーグは、11クラブの中で8クラブがJリーグに所属するクラブになります。Jリーグというのは男子のプロサッカーリーグで、現在Jリーグには56のクラブが所属しています。56のクラブの内、女子プロサッカーリーグに加盟したのが8クラブ、女子のプロクラブを作ったJリーグのクラブが、56分の8ということになります。これが多いのか、少ないのか。正直なところ、私は少ないと思います。本当にざっくりした言い方をすれば、人口の半分は女性です。女性でサッカーをプレーしたり、サッカーに関わる方が増えれば、その分サッカーに関心を持つ方が増え、ファンが増えていくはずだと思います。

女性がサッカーに関わる環境を整備していくことは、男子のサッカーにもいい影響を必ず与えると思いますので、サッカー界全体の発展にもつながっていくということを私は考えています。もっともっと男子のクラブが女子にも力を入れて、性別も関係なく、もっと言えば、障がいも健常も関係なく、サッカーをプレーする人をどんどん増やしていくことが、サッカーを発展させ、スポーツ界を発展させていく大きな要素になるのではないかと思います。

サッカーの世界では“リスペクト”という言葉が非常に大切にされています。(ここにありますように、)サッカーを取り巻くあらゆるものを大切にしようという考え方は、私も指導に関わることがありますが、その中で、つつい昔の癖で対戦相手のことを「敵がこうきたら…」という言葉を使わず使ってしまうことがありますが、敵ではなく、一緒にゲームを作り上げる“仲間”ですから、敵と言っはいけないということ、自分にも普段から戒めとしています。ですから、「相手」がこうきたら」という言葉を意識的に使うようにしています。

こういった精神は選手の人格の育成にも非常に大切なことだと思いますので、私自身からも、クラブに所属する、あらゆる年代の選手に「リスペクトするということが大事だ」と、指導者にも、都度、選手にはこういったことを教えてほしいということで、常に私たちも大切にしています。

互いを尊重する共生社会は非常に壮大で、私自身もそれがどうしたら実現できるのかと考えますと、なかなか難しいのですが、このクラブでの活動を通じて、まずはネガティブなところを取り除くところから始まっています。やはり選手一人ひとりが自立をし、自分で物事を考えて、他人を尊重するという考え方を養っていけるようなことを第一にしています。そして先ほどの理念を実現していくことが互いを尊重する「共生社会」につながっていくと考え、今行動しています。以上です。ありがとうございました。



(來田) ありがとうございます。とても身近な社会でのスポーツ活動の中で、ちょっとしたことを心掛けていくことで、きっと変わっていく共生社会があるのではないかということをお伝えいただいたかと思います。それではオリンピックとして、オリンピックの世界も見てこられた兼松さんの立場からはどうでしょうか。共生社会は、どういうものとして受け止めることができるでしょうか。兼松さん、お願いします。

(兼松) よろしく申し上げます。私の考える「互いを尊重する共生社会」について、私自身のこれまでのラグビー人生を振り返りながら、お話しさせていただきます。

先ほども申し上げましたように、私は5歳からラグビーを始めました。5歳上の兄が先にラグビーを始め、その練習の送り迎えについて行っていた妹の私も、一緒にラグビーをやったらどうかと指導者の方に誘われたことがきっかけです。

両親はスポーツ経験がほとんどなく、ラグビーのことは全く知りませんでした。私は他のスポーツを男の子と一緒にするようにラグビーをしていましたので、ラグビーが男性のスポーツだと思ったことはありませんでした。しかし、他のラグビースクールと試合をした時、相手チームの選手から「女だ」と言われたことがありました。また知らない男性に、「ラグビーをする女の子なんて恐ろしい」と言われたこともありました。一番悲しかったのは、試合が終わって両チームで握手をする時に、相手チームの選手が私を避けて、握手をしてくれなかったことです。女子はラグビーをしてはいけないのだろうか、髪の毛を短くし、女子だとバレなければ握手してもらえないかもしれないと思ったこともありました。そんなある日、自ら握手をしに来てくれた相手チームの選手がいました。あの時の大阪弁のありがたいの響きを今でも忘れません。ラグビーの仲間として認められたと思えた瞬間でした。

このように男女一緒にラグビーをすることが当たり前だった私が、小学校6年生の時に一度だけ女子ラグビーチームでプレーをしたことがありました。それが、現在私が所属している名古屋レディースというチームです。当時、このチームには日本代表選手が多数在籍し、小学6年生の私にとって、お姉さんたちはまさにヒーローでした。いつか私もこのチームに入り、日本代表選手になりたいと思いました。

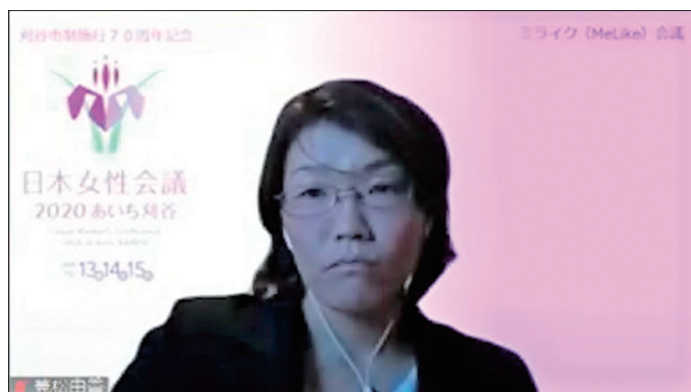
中学・高校時代は学校の部活動に専念し、大学入学と同時に名古屋レディースでラグビーを再開しました。このチームには学生だけでなく、様々な職業を持った社会人、そして外国人選手も在籍していました。皆、ラグビーが大好きな女性たちでした。

19歳の時にワールドカップに出場し、海外の女子ラグビー選手たちと初めて交流しました。日本にはない文化にもっと触れたいと思い、翌年ニュージーランドにラグビー留学をする決意をしました。そこで見たのは、子どもを連れて練習や試合に来るお母さん選手たちの姿でした。子どもたちに見せる優しい母親の姿とラグビーをする格好いい選手の姿を目の当たりにし、私もこういう女性になりたいと強く思い、帰国しました。その後、ママさんラガーとしてリオ五輪まで競技を続けてきました。時には代表合宿で長期間家を離れることに対し、育児放棄だと非難されたこともあります。それでも家族に支えられ、続けることができました。

リオ五輪アジア予選後に嬉しかったことは、長年ずっと戦ってきたカザフスタン代表選手の中に、何人ものママさんラガーの存在があったことを知ったことです。お互いに母親であることを知らずに、10年以上ともに真剣勝負をしてきました。このように女性たちが大好きなスポーツを続けられる社会は、互いを尊重する共生社会に欠かせないと思います。

近年の国内における女子ラグビーの状況は、30年前と比べ、随分変わりました。小中学校の体育の授業で、タックルのない「タグラグビー」が導入されたこと、中学校のラグビー部で女子選手がプレーする姿が多く見られるようになったこと、全国各地の学校で、女子ラグビー部が新設されるようになったこと、中学・高校生の女子ラグビーの大会が開催されるようになったこと、そして全国から選出された中学・高校生の女子選手を育成するアカデミーが設置されたことです。このような変化により、ラグビースクールでラグビーをしていた女の子たちが、中学・高校でもラグビーを続けることができるようになりました。最も難しいと考えられるのは、中学校のラグビー部で、女子選手がラグビーを続けることです。そこで、このような好事例を紹介します。

右の写真は私の娘です。中学からラグビー部でラグビーを始め、現在女子部員は娘一人です。入部当初は女子更衣室がありませんでしたが、顧問の先生の呼びかけにより、部員全員で長年使用されてこなかった部屋を掃除し、ラグビー部女子の部室を用意してくれました。娘はラグビーを始めて半年になりますが、ラグビー部の仲間たちとラグビーをすることが、学校生活の中で一番楽しいと言っています。このようにスポーツを通して子どもたちの多様性を育む教育が浸透することにより、互いを尊重する共生社会の実現につながると私は考えています。以上になります。ありがとうございました。



(来田) ありがとうございます。オリンピックとしての経験だけでなく、例えば身近なところで、スポーツで今まで認められていなかったり、あるいは、そんなことは普通ないと思っていたことを少し変えていこうとするだけで、どんどん変わっていく。そういう事例を、ラグビーというスポーツを通して見せていただいたかと思います。それでは次にLGBT支援の立場からということで、村木さんをお願いできますでしょうか。

(村木) ありがとうございます。お二人の話は、とても興味深かったです。私はレズビアンですが、やはり子どもの時、サッカーがしたくてもできなくて悔しい思いをした記憶があります。

今LGBTの子どもたちは、自分が思うスポーツがなかなかできずにいます。例えば、先ほど柔道の話が出てきましたが、柔道で男子は胸がはだけてしまうのです。それが嫌でTシャツを着ていいかというと駄目なのです。スポーツはルールがまずあって、それを皆で守るという形になっているのですが、そのルールが決められた時に、私たちLGBTの存在は想定されていなかったはず。多様性を尊重する、お互いに尊重するという場合に、今尊重されていない人たちがいるのだということは是非知っておいていただき、そのルールが絶対だというのではなく、異論が言えるようにしてほしいのです。こうした方がいい、こうしてほしいのだという声を皆で聞いてほしいと思います。“調和”という言葉も出てきていますが、調和というのは異論がないことではなく、個々にきちんと意見を言って尊重してもらえると形であればいいと思います。私からは以上になります。

(来田) ありがとうございます。そうですね。スポーツのルールは長い歴史の中で作られてきたので、これが当たり前だ、とみんなが思ってしまうことが結構多くて、これを変えようとする、国際的な組織まで伝わらないと、なかなか変わらない。そう思っている場合は多いと思うのですが、考えてみれば、私たちが普段楽しむスポーツなら、別に自由に変えてもいいですよ。どんどん変えて、より多くの人と一緒にできるようになるということのほうが、ずっと素敵かもしれないです。ありがとうございました。それでは宮嶋さん、いかがでしょうか。

(宮嶋) 私は本当に恥ずかしいのですが、テレビ業界、放送業界というのは男性が圧倒的に力を持つというか、入社して、制作をして、下積みの時代は男女それぞれ仕事をするわけですが、管理職になるにつれて、どんどん男性ばかりになっていくという。気がついたら、全てタバコを吸う部屋で決まっているの？みたいな状況が生まれています。

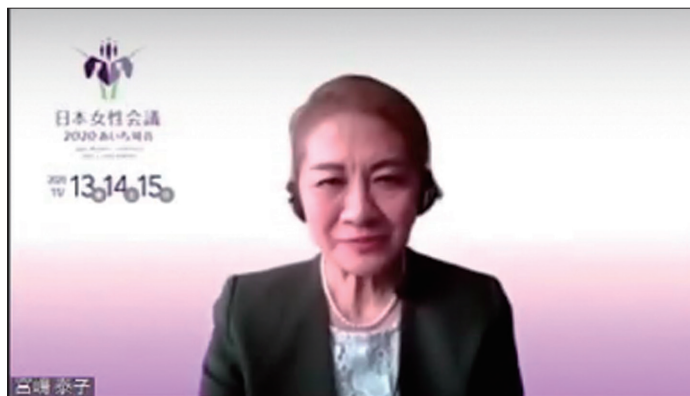
ただ、私は若い人たちがいろいろな番組を作る時に、やはり10人いると10人の良さが出て、その番組ということが作られるということは感じています。たまたま私の場合は、本当にいろいろな先生方や大学の研究員の方や、そういう人たちの方向性であるとか、アスリートやコーチの人たちが何をどう求めているかということで、自分なりのものを作ってきましたが、またそうではない、母親としてのアスリートに非常に密着している者などいろいろいるわけで、ディレクターの素養は番組の内容に表れるものだと思います。

互いを尊重する共生社会ということで、私がいつも思うのは、金子みすゞさんの詩です。『私と小鳥と鈴と みんなちがって みんないい お空はちっとも飛べないが 飛べる小鳥は私のように、地面を速くは走れない。きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のように たくさんな唄は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。』

要するに、「これはできないかもしれないけれど、これはできる」という発想が、私はとても重要だと思います。ですから、若い子には必ずこれを渡して、自分はどうかということ客観的に考えてみてと言います。こういうことからダイバーシティを学んでくれればと思います。こういうことを知ると、他人に対する尊敬や尊重も生まれてくると思います。

それと昨日の基調講演でも上野千鶴子さんがおっしゃいましたが、これは有名な、東京大学の入学式で行った祝辞です。「入学おめでとうございます」から始まりますが、「あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれたいひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムは決して女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想です」。

昨日、上野さんがおっしゃっていたのは、この前段の「恵まれたい人々のために使ってください」というところだけ、よくフィーチャーされるけれども、実はその下にこういうことを言っているのよ、ということをおっしゃっていたので





すね。これはとても重要だと思います。

それともう一つ、今、「鬼滅の刃」が大流行しています。この中で、こんな言葉が出てきます。「なぜ自分が人よりも強く生まれたのか わかりますか 弱き人を助けるためです 生まれついて 人よりも多くの才に恵まれた者は その力を 世のため人のために 使わねばなりません 天から賜りし力で 人を傷つけること 私腹を肥やすことは 許されません 弱き人を助けることは 強く生まれた者の責務です 責任を持って 果たさなければならない 使命なのです 決して 忘れることなきように」。

この言葉が出てくると、皆、大人は見えていてウルウルとくるのだそうです。これが今大流行しているというのは、実にいいことだと思います。要するに、差別や、いろいろ虐げられてしまった人々というのは世の中にどうしても弱者として存在するわけで、強者と言うのは、ただ上に上っていくことだけを目指して生きていくというのが、現代社会のように思われがちですが、ここでこういう言葉をもらって、子どもたちがこの言葉の真意が理解できるようになっていくと、私は、世の中は少しずつ変わっていくのだらうと思います。これはスポーツから変えていくという意味ではないのですが、こういう社会現象、アニメという社会現象を通して変わっていくことはできるのだと、今強く感じております。

(来田) ありがとうございます。「鬼滅の刃」、いま人気がありますが、それは多くの響く何かがあるのだと思います。スポーツは、とにかく自分の弱さを認めるのが苦手な文化というか、強いことの方にどうしても価値をおきがちなので、弱さみたいなものを認めづらいということがあります。そこに対して、今、宮嶋さんが言ってくださったこと、弱さを認めるけれども、その弱さを他の人に補ってもらい、一緒に作っていく社会、みたいなものが、共生社会の一つのあり方としてあっていいのではないかと。加えて、強い人が、この強さには権力も含まれますが、権力は民主主義的な社会の中では、人から預け託されたものに他ならないわけで、それを誰のために使うのか、ということも忘れてはいけない。そういうことも伝えていただいたように思います。

今、皆さんのお話を聞くと、スポーツには課題ももちろんありますが、希望もあることが伝わってきます。そしてその希望のようなものを可能な限り使っていきたい。特にオリンピック・パラリンピックが日本で開催されようとする中で、いわゆるイベントとしての大会だけではなくて、スポーツの価値のようなものが浸透する、といったようなことがあれば、社会はいい方向に向かっていくのではないかと、そういうことも期待できるのではないのでしょうか。残念なことに、COVID-19という新型コロナウイルスによる感染症は非常に厄介で、いわゆるスポーツの場面でお互いに触れ合ったり、仲良くなったりするということが、とても難しくなる感染症です。実質的には、今までどおりのスポーツはなかなか難しい。そうして、できなくなって初めて、私たちが気づくこともあると思います。

こうなって改めて、スポーツのこういうところが大切だ、大事だ、ということにも、皆さんお気づきになったのではないのでしょうか。そこで、コロナ禍の中で気づいたスポーツの可能性はどのようなことか、今、スポーツと私たちにできることは何だろう、ということについて、一言ずつ話していただけたらと思うのですが、どうでしょうか。なかなか大きなテーマではあるのですが、宮嶋さんからお願いしてよろしいですか。

(宮嶋) スポーツにできることということですが、当たり前に行っていたことをできなくなって振り返ることができるということ、これはとても大きいと思います。スポーツというのは自らの生活にとって何なのか。それからスポーツで得られたものの価値をどうやって補っていくのかという、こういう基本的なことを、アスリートも、普段エンジョイでプレーしていた人も考えていければと思います。

何よりも現代社会というのは、どうしてもAIやインターネットなどの発達により、人間の身体性が希薄になっています。そういうところで、こうやって身体を動かさないと、本当にどんどん弱っていくとお感じになった方はとても多いと思います。慌てて、何か家でできることはないかと、それから散歩に少し早歩きで行こうとか、そういう風に身体性を取り戻すために気づきを与えてくれたのが、私はCOVID-19だと思います。

それはアスリートにとってもそうで、オリンピックをやるか、やらないか、まだわからないけれども、いずれにしても1年後に延期になってしまって、目標がもうブレブレだという人たちがたくさんいます。こんな時だからこそ、自分がやってきた何十年、小さな頃からやってきたスポーツが自分にとって何なのかということを考えるきっかけになると思います。それはコーチや親との関係。それから食事もそうだと思います。どういう食事をするのが自分の身体を作っているのかということ、いつもなら忙しくてNTC=ナショナルトレーニングセンターで食べてしまう食事が、自分で作ってみると、こんなに栄養のことを勉強しなければいけないのかとか、そういう基本の基から学べるということが、この期間なのだと思います。

そして、日本のスポーツ環境の問題点を考える時間だと思います。私は先ほど、体育会系的システムが非常によろしくないのではないかと言いました。これは、たまたま日独ハーフとご自分でおっしゃっている、(ハーフという言葉はあまり使いたくなかったのですが)、サンドラ・ヘフェリンさんという方の著書で、『体育会系~日本を蝕む病』という



本を読んだ時に、なるほどと思ったのですが、やはり、日本が持っている外から見ると変だという“体育会系”というのは、はっきり言って日本にスポーツが入ってきた、軍隊的訓練そのままにまだ残っているシステムだと思いますので、そういったものを変えていくことが重要ではないかと思います。

例えば、大坂なおみさんが日本の中でもし部活に入っていたとしたら、まずローラーで地面をならすことから始めて、「テニスは上手だけど、本当にそれでいいと思っているの？」などといじめにあうかもしれないし、どうなのかと。こういうことを考えてほしいと思います。今のように大坂さんがしっかり意見を言えるように育つことが、日本のスポーツ環境の中でできるのだろうか、こういうことを考える時間にしてほしいと、私はそのためにコロナがきたと思っているぐらいです。

常に「失ったものを数えるより、今あるものを数えよ」という障がい者スポーツの原点ですが、それは、今回コロナで私たち一般の人たちにも当てはまると思います。何々がなくなった、失ってしまった、もう駄目だ、こんなについていない人はいない、と考えるのではなく、こんな時だからこそ、今あるものを数えて、もっと遅く育っていきたい。こう考えていったらいいかと思います。以上です。

(来田) ありがとうございます。与えられた条件をどれだけ活かせるか、ということに勝負を賭けていくのもスポーツの良さですね。トップアスリートは皆さん、そうしていると思います。困難さもありますが、それは誰にもあり得る困難さで、それをどうやって上手く、ポジティブに活かせたか、ということが、実はパフォーマンスの結果になって表れてくる。そういう話をよくアスリートの方から聞きます。そういうことと言えば、今、宮嶋さんがおっしゃったことは、そのとおりだなと思います。これができない、あれができないという「ないない」の発想ではなく、何かそれを「あるある」の発想にしていけば、力になっていきます。そして、スポーツに関わる人たちは、それを上手に活かしている、ということで、参考になるところかと思えます。ありがとうございます。それでは、村木さん、いかがでしょうか。

(村木) 今とても聞きながらお聞きしていました。今日本では、体育会系の問題があると聞きましたが、LGBTの子どもたち、「男らしくない男の子」をいじめる子たちが誰なのかということ、やんちゃな男の子であるケースが多いのです。そのやんちゃな男の子が誰に憧れているのかということ、スポーツ選手です。スポーツ選手が子どもたちに、「いじめはいけない」ということをしっかり発信していくこと。それはすごく大事だと思います。

LGBTの人口は大体3%から8%と言われており、若い人の間ではもっと多く、10%という数字が出ている調査もあります。しかしその人たちがカミングアウトして、スポーツを続けられる状況でしょうか。カミングアウトしている人はほとんどいないということは、とても言えるような状況ではないということを目指していると思います。

その中で、昨年ラグビーのワールドカップがありました。実はラグビーの選手協会がプライドハウスと協力して、アスリートからメッセージビデオを出してくれました。それにはすごく励まされました。そういった形で、このコロナ禍で部屋に籠って、しんどい思いをしている子どもたち、特にLGBTの子どもたちは、理解のない親とのステイホームを強いられ、非常にしんどい状況におかれています。そういう子たちにしっかり届くメッセージを、スポーツをすることで届けられるのではないかと思います。

大阪マラソンから引き続いて、私もランニングが趣味になってしまい、ちょこちょこ走っていますが、先日、オンラインでのマラソン大会、「レインボーマラソン」というチャレンジもプライドハウスでやりました。これはランニングアプリがあり、そこに登録し、そのアプリで記録を計測して提出するという形です。男女の登録は必要ありません。趣味で走っているものですから、公式記録にする必要はないわけです。虹色がLGBTのシンボルカラーなので、好きな色を登録して、その色の中で順位付けをするということをやりました。なかなかつながりにくい状況にはなりましたが、こういった形でつながるのも面白いと思います。

LGBTは法整備が日本も海外もまだまだです。しかし法整備をするためには、一般の方の7割以上の支持が必要です。そういう意味では、出会ったことがない人ではなくて、一緒にスポーツをする人として、一緒に私たちの権利獲得について応援してくれる人が増えればいいと思います。ありがとうございました。

(来田) ありがとうございます。カミングアウトがなかなかできない、本当の自分を伝えられない…スポーツですらそれができないという、その状況を変えていきたいですね。このパネルを聞いていただいたことで、ちょっと立ち止まって考えて、変えていくことができたなら、すごくいいと思いました。ありがとうございます。それでは堀田さん、いかがでしょうか。

(堀田) 私もこのコロナ禍で、本当にいろいろなことを考えさせられました。私がこのクラブに関わるようになるまでは、それほど“スポーツとは”ということに関しては、さほど深く考えたことはありませんでしたが、クラブに関わるようになり、本当にいろいろ考えるようになりました。

スポーツとは何だろうと考えると、まずは誰でも子どもの頃から走ったり飛んだり跳ねたり、身体を動かすという喜びを感じたり、それによって身体が鍛えられたりという身体的・肉体的成長の部分。そして協調性や努力をすることの大切さ、一つ一つの積み重ねが成長につながっているという実感であったり、達成感、それから相手を尊重するということを学んでいくという、精神的・人間的な成長につながっていくという部分。こうしたことは誰も経験したことがあることではないかと思います。それから勝ち負けにとどまらず、スポーツを通じて、人と人とのつながりができていく、コミュニティが形成されていくという面もあると思います。またプロスポーツを見て、勝負に一喜一憂したり、一流の選手同士の名勝負に感動したり、選手が成長していく姿に自分を重ね合わせたり、いろんな面で観戦をすることも、スポーツの大きな魅力だと思います。そしてもう一つが、興行、ビジネスとしての側面で、私たちのクラブを考えた時に、このすべてが複雑に絡み合っていると感じています。

私もこのクラブに関わるようになってから、こういうことを考え始めただけでして、普通に生きている分には考えたこともありませんでした。こういったスポーツの価値というものを、もっと正面から考え認識していくことが重要だと、改めて今回思っています。私たちのクラブは興行・ビジネスという面もやはり避けて通れないところで、これは私たちの大きな反省点の一つではありますが、ボランティアのスタッフに支えられている部分がやはりあります。本来であれば、きっちり報酬としてお支払いしなければいけない部分もあるでしょうし、支えてくださる皆さんの厚意に甘えているという部分は正直ありますので、私たちのクラブの課題としては、ビジネスとしてやはり成立させていかないと長続きしないということがあると思います。

今回コロナにより、あらゆるスポーツの活動が停止しました。プロ野球、Jリーグは勿論、私たちが所属している日本女子サッカーリーグのリーグ戦も、4か月延期になりました。その間、何か月も選手たちと一緒に練習ができませんでした。サッカー選手としては、サッカーができないということは本当にもう人生を奪われたぐらいの感覚に陥ってしまいますので、メンタルの部分でもかなり配慮が必要だったと、振り返って思います。

ただその中で、私たちのチームのコーチ陣も、本当にいろんなことをしてくれて、選手に事前に課題を与え、ある一定の時間に皆がZoomで集まり、それぞれできた課題や、できなかった課題を披露し合うなど、そういうことをしてくれました。コロナで本当に孤独な中だとは思いますが、そういったつながりを何とか維持する努力をしてくれて、選手たちの励みになったのではないかと思います。

私自身はこのコロナにより、サッカーがない日常を経験し、サッカーのない週末がどれほど味気ないものなのかを実感しました。特に子どもたちは、そういったつながりが保てたととしても、各種の大会が軒並み中止になってしまい、目標を失ってしまったことは、やはり非常に大きなダメージだったのではないかと考えています。目標を持って頑張ることが、どれほど尊いことなのか、目標がない状態で一人で練習することが、どれほど辛いことなのかというのは、本当にクラブに関わる皆が実感したと思います。

このコロナの問題に関して、とかく経済を回すことも重要だという話もされますが、先ほど話したようにスポーツもビジネスという面がありますので、経済という面からすれば、早く観客を入れて試合を再開することも必要だと思えます。ただスポーツのこういった価値そのものが、やはりこのコロナにより奪われている。経済だけではなく、スポーツの価値そのものが、大きくコロナにより毀損された反面で、その重要性にまた気づくチャンスになったのではないかと私自身は感じています。コロナ禍で実感したこうしたスポーツの尊さや価値を、もう一度社会で認識し、これを大事にしていくということも、スポーツやスポーツビジネスに関わる人間として追及していきたい、考えて行動していきたいと今感じています。ありがとうございました。

(来田) ありがとうございます。やはり現場でスポーツができないことは、結構、大きなダメージになってしまっているとともに、その先には希望もあることを教えていただいたと思います。ありがとうございました。では最後に、兼松さん、お願いします。

(兼松) 私がコロナ禍で気づいたこと、改めて大切だと思ったことをお話しさせていただきます。日本のラグビーには“ノーサイド”という言葉があります。これは試合終了を意味する言葉で、海外ではフルタイムと言われています。日本では敵味方がお互いの健闘をたたえ合うことをノーサイド精神と表現されています。先ほど私がお話したラグビースクールの試合の後に握手してもらったというエピソードが、まさにノーサイドです。この握手により、試合中に感じた痛み、苦しみ、喜び、情熱、様々な思いを共感することができる気がします。



しかし、今年のコロナ禍では握手は勿論、思い切り身体をぶつけ合うラグビーは、これまでのように安心してすることができなくなりました。仲間とパスをし合うこともできない、タックルすることも、されることもできない時期があり、選手たちは不安な日々を送ったと思います。そしてその不安を共感しようと、これまで以上に別の方法で互いに歩み寄ろうとしたのではないのでしょうか。

試合をすれば強いチームが勝ち、弱いチームが負けます。しかしウイルスには強いも弱いもなく、敵も味方ありません。コロナ禍で人は誰もが同じであることを思い知らされました。これはウイルスにより生み出された、ある種のノーサイドではないのでしょうか。

私がヘッドコーチを務める女子セブンスユースアカデミーは、全国から選抜された中学・高校の女子選手たちを育成する活動です。1か月に一度、3泊4日で合宿を行います。今年は2月を最後に合宿は延期され続けています。そこで、どうやって集まらずにアカデミーを行うかを毎月スタッフで話し合い、実践してきました。Zoomを使ったオンライントレーニングや、映像を用いたプレーの分析をし、実際のラグビーをイメージしながらディスカッションをしました。また毎月スタッフと選手一人ひとりがLINE面談を行い、選手たちに寄り添うことを心掛けてきました。更にオリンピック教育の一環として、中京大学スポーツミュージアム様にご協力いただき、オンライン鑑賞を行い、普段は交流できない冬季競技のチームの選手たちと交流したりなど、オンラインならではの活動も積極的に行いました。

このように今年のアカデミーの活動を通して、離れていても心はつながることができることを学びました。その根底には、共感しようとする気持ちがあるからだと思います。コロナが収束したら元の生活に戻り、また人々は会いたい人に会い、安心して握手をすることができるようになるでしょう。しかし忘れてはならないことは、コロナ禍で誰とでも共感しようとしたノーサイド精神です。自分と同じ考えや価値観を持った人とだけ共感しようとするのではなく、違う者同士であっても共感しようとするれば、互いを尊重する共生社会の実現につながると思います。ウイルスがある種のノーサイドを生み出したのではなく、本来あるべきノーサイドがコロナ禍で気づかされたと思います。互いを尊重したノーサイドの世界が実現するために、スポーツには世界中のあらゆる人々の共感ツールになる可能性がある、私は考えています。以上です。ありがとうございました。



(来田) ありがとうございました。ふと気がつくと、時間的にもうおしまいになってしまいました。すべての質問へのお答えをホームページに掲載する形にさせていただきます。質問をしてくださった参加者の皆さん、本当にどうもありがとうございました。

普段、自由にのびのびとスポーツをする中で、私たちは何かの壁を自分自身で越えたり、誰かが壁を越える手助けができる、そういう希望を、それぞれの登壇者のお話から感じていただければ、大変嬉しく思います。例えば、刈谷市はものづくりのまちです。この町が多様化すれば、きっとどんどん新しいアイデアが生まれ、新しいものが生み出されるのではないのでしょうか。それはきっと世界を幸せにしていけることだと思います。

スポーツに限らず、何か新しいことを始めるには、エネルギーも時間も必要です。今、若い人たちに人気のあるシンガーソングライターの「あいみょん」さんの歌が私は好きで、彼女の歌にこんな歌詞があります。「余裕のある人はかっこいい でも余裕のない人生は燃える」っていう。明日から余裕のある人としてかっこいい人生を送るか、あるいは余裕のない人生で燃えるか、どちらかわかりませんが、今日のパネルが壁を越えるための新しいチャレンジをしてみたいと思えるような、そのための手がかりのひとつとしてスポーツがあるかもしれない、と受け止めていただくことができればと思います。

今日は登壇者の皆さん、本当にお忙しい中ありがとうございました。そして貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。これにて、シンポジウムを終了します。どうもありがとうございました。お疲れ様でした。

#### ●企画メンバー

小鹿 登美 石田 芳加 鈴木 直美 瀧澤 知子 久恒 美香



## 質疑応答

Q：スポーツで解決していかなければならないハラスメントには、どのようなものがあると考えられますか。差し支えない範囲で、ハラスメントの具体的な事例などもあげてください。

A：【宮嶋氏】

暴力によるハラスメント、言葉によるハラスメント、また接触するセクシャルハラスメント、意図的な行為によって相手を貶めることなど、この4つが主なハラスメントではないでしょうか。

スポーツでは「できる」「できない」がはっきりと目に見えてしまいます。その中で、できないことに腹を立てて暴力で「何でできないんだ」と制裁を加えることはもちろんやってはいけないハラスメントの筆頭でしょう。

また、言葉で「ドジ」「どんくさい」などと揶揄するような言葉をかけることもハラスメントとなるでしょう。

スポーツは軽装で行うため、体の線が出やすく、セクシャルハラスメントも起きやすくなります。指導の際に体を意図的に触ることもセクシャルハラスメントとなります。

また、「胸が大きいから走れない」などという言葉によるセクシャルハラスメントもあります。

スポーツで代表になるかならないかというときに、公正な選考方法によらず、意図的にある人を落とすというのもハラスメントに入ります。

【兼松氏】

服装に関するハラスメントがあると思います。私は子どものころ、スポーツをすることは大好きでしたが、体育の授業や運動会はあまり好きではありませんでした。その理由は、当時女子の運動着はブルマーと決まっていたからです。学校で担任の先生に毎日提出するノートに、ブルマーが嫌だと書いていたことを覚えています。一方、競技者の服装は、さまざまな目的によって、男女共に改良され続けています。目的の一つにパフォーマンス向上がありますが、ラグビーのようにランニングとコンタクトが含まれたスポーツの場合、機能を重視するがために偶発的な肌の露出を避けられないこともあります。このことから、必ずしも男女同じ服装であることがいいとは言いきれません。

以上から、男女で服装を分けることも、統一することも、ハラスメントが潜んでいる可能性があります。個人やチームが、安全を配慮した上で色やデザインを選択できることは、スポーツを通してハラスメントを解決するために大切であると考えます。

【村木氏】

8ページをご参照ください。

[https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports\\_for\\_everyone.pdf](https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports_for_everyone.pdf)



◀『誰も排除しないスポーツ環境づくりのためのハンドブック SPORTS for EVERYONE (プライドハウス 東京)』

Q：LGBTの子どもたちを含め、誰もが楽しめる授業にするために、男女別に分けない体育をすることについてどう思いますか？

【宮嶋氏】

悪いことではないと思います。ルールに工夫を凝らすなどして、楽しめる身体活動は有意義だと思います。

【兼松氏】

必要だと思います。運動能力は性別に関わらず、人それぞれ異なります。それは、好きなもの、得意なことが異なることと同じです。体育の授業で大切なことは、スポーツを通して互いを高め合い、協力し合い、認め合うことだと思います。この目的を達成する過程で全ての子どもたちが楽しめる授業にするためには、教材の工夫や従来のスポーツのルールを変えることも必要だと考えます。

【堀田氏】

中学生になると、男女で筋力に大きな差が出てきます。また、男子、女子の中でも、運動能力に差が出てきます。男女別ではなく、能力的な差異、種目の得手不得手などで分けるなど、多様性を認めることは良いことだと思います。



【村木氏】

5ページをご参照ください。

[https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports\\_for\\_everyone.pdf](https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports_for_everyone.pdf)

無意識に男女別になっていることについて、一つ一つ丁寧に考えていくべきかと思います。



Q：「スポーツが人生を切り拓く武器」になるようにするために、日常あるいは地域でどのような意識を持つことが大切だと思いますか。

【宮嶋氏】

スポーツが持っている「上達するための工夫や努力」「自分の体を感じてコントロールする面白さ」「作戦を立てて実行する頭脳プレー」「仲間と分かち合う共感性」「サポートし、サポートされる楽しさ」等、様々な特徴を折に触れて自分の中で反芻することが重要だと思います。

スポーツは行うだけでなく、そのあと残った記憶を自分の中で反芻したり、仲間とともに思い出しながら語り合ったりすることで、より熟成させることができ、人生を意味深いものにしてくれると思います。

Q：男性スポーツのイメージが強いサッカーやラグビーですが、サッカーの場合はプロ化が遅れたり、女性への普及が進まなかった原因はどのようなことでしょうか

【堀田氏】

テニス、卓球、バドミントン、バレーボールなどは、コートが分かれており、身体的接触がありません。

バスケットボールはコートが分かれていませんが、身体接触は禁止されています。

サッカー、ラグビーはフットボールであり、その成り立ちから身体的接触が認められており、むしろ身体的接触がその魅力の一つでもあります。

男性と違って、筋力や体の強さで劣る女性の多くは、そもそも身体的接触を伴うサッカーをやりたいがらず、子どもにもやらせたくない傾向があると思います。

男子と女子は同じルールのもとでプレーしていますが、身体的接触については男子と女子でルールを分ける、もしくは適用を厳格化するなどして、女性に親しみやすいスポーツにしていくことも考えるべきではないかと思っています。

他方で、男子の中でプレーしたいという女子選手もいます。先日、永里優季選手が男子チームでプレーすることが話題になりました。

男女という枠にとらわれず、1人のアスリートとして尊重することも大切だと思います。

Q：サッカーやラグビーが「男性だけのスポーツではない」と考えたきっかけがあれば教えてください。

【兼松氏】

私は、幼少期に地元のラグビースクールでラグビーと出会いました。ラグビースクールでは、男女同じチームでプレーをします。指導者の方も、男女で指導方法や内容を分けるようなことはありませんでした。

大学生から女子ラグビーチームでラグビーを再開しましたが、ラグビーの本質的なところが男女で異なると感じたことはありません。男性的と言われるラグビーのプレーの激しさや強さの根底には優しさがあります。そのことを教えてくださいましたのは、ラグビースクール時代の指導者の方々です。男女隔たりなく大切なことを指導して下さった指導者の方々には心から感謝しています。

Q：異なる意見を持つ人と信頼関係を気づきながら、お互いの意見を主張しあうために心がけていることがあれば教えてください。

【村木氏】

相手の意見をしっかり聞くこと、背景を想像すること、必要に応じて第三者を入れること、データと事実に基づいて話すようにすること等があるかと思います。

自分の持っている「特権」を理解しておくことも対話には重要なことかと考えます。